

○高野泰弘(大久野保育園 園長)

1. はじめに

東京都西多摩郡日の出町にある大久野保育園は社会福祉法人志正会が運営している認可保育所である。65年の歴史があり、ルーツは寺子屋から始まっている。私は園長5年目で、園長就任時から保育改革を実施している。「居心地の良い音環境」を求めるきっかけは、保育改革を進める中で、どうしても改善できない、「ざわざわした環境」があったからだった。

「子どもの育ちを支える環境作り」にシフトしたきっかけは園長交代というタイミングだった。平成29年度の園長就任から【保育内容の変更】【保育環境の大幅な見直し】【園庭のバージョンアップ】などの大改革を行った。「昭和の昔ながらの保育」から「21世紀の保育」への大きな方向転換だった。平成30年の保育所保育指針の改定が追い風となっていた。現在の保育業界では「保育の質の向上」に向けた、大変革期を迎えている。その中で、環境構成の大切さはとても重要視されている。すでに先進的な取り組みをしている園もあれば、依然として変わっていない園があり、日本の保育の質が高いレベルで標準化されるにはまだまだ時間がかかると考えられる。

保育所の環境構成を見る時の視点として大切にしていくのが[時間 空間 物 人]である。大久野保育園が行なった改革では、【保育の流れ[時間]を変え】【[空間]の環境設定を行い】【[物]を揃え(おもちゃや家具類)】【[人]の意識や行動の修正】を行ってきた。改革以前の日常では、“子どもが出す音”よりも大人の指示・命令が“騒音”と感じる場面が多かった。しかし、その保育から脱却することで見えてきたのが、「子どもや大人の声の原因ではなく、構造上の問題があるのではないか?」という、疑問であった。

大久野保育園では、素早い転換によって「保育の質」が向上した。これは数値化できるものではないが、「子どもたちの姿」や「保育士の姿」「園内外の環境構成」から見るができる。しかし、発展途上であり、試行錯誤の段階である。穏やかでゆったりした生活を送ることができるようになったが、[子どもが困っているときに出す音(泣き声や痛癢時の音)]がよりクローズアップされ、[子どもたちの楽しい声が重なり合って、大きな音へと変わり、“騒音”]となることがあった。特に発達に凸凹のある児童がいるクラスはより顕著であった。また、保育士は激務であり、[不調や慢性的な疲労を抱える職員][職員間のトラブル][ストレスを抱える職員]も少なくなかった。子どもの育ちを支える職員が少しでも働きやすい環境で、安心して長く働ける職場にしたいとも考えていた。

2. 音環境を改善するきっかけ

早稲田大学人間科学学術院の佐藤将之先生との偶然の出会いから、音環境改善を行うことになった。「園の関係者が考えて、アイデアを出し、変えていく研修スタイル」にもとても共感が持てた。保育者は“今いる音環境”が当たり前の環境であったため、「音環境の良し悪し」について考えることがなかった。保育者自身が自らの置かれている状況を理解し、“自分事”として捉えられるようにすることも大切だと考えていた。令和2年度の通年の【音環境研修】は職員が自ら考え、行動する研修として進めることになった。職員みんなが、「子ども達の育ちを支える環境作り、働きやすい職場作り」に主体的に参加し、インプットとアウトプットを行える時間となった。

今回の論文では、研修の流れや具体的な実践例を元に、大久野保育園がたどった「居場所の良い音環境作り」について発表していく。「少しでも多くの園で、子どもや保育者のための音環境が改善される動きにつながって欲しい」との願いも込めている。この改善には、早大佐藤先生とADC船場先生、野口先生の全面協力があり、進めることができた。また、大久野保育園の職員に【何でも作っちゃう[ブリコロール長谷川]】がいるので、セルフビルドができる点は他園にない強みである。
<http://www.ooguno-hoikuen.jp/publics/index/84/#page-content>(ブリコロール長谷川の情報)

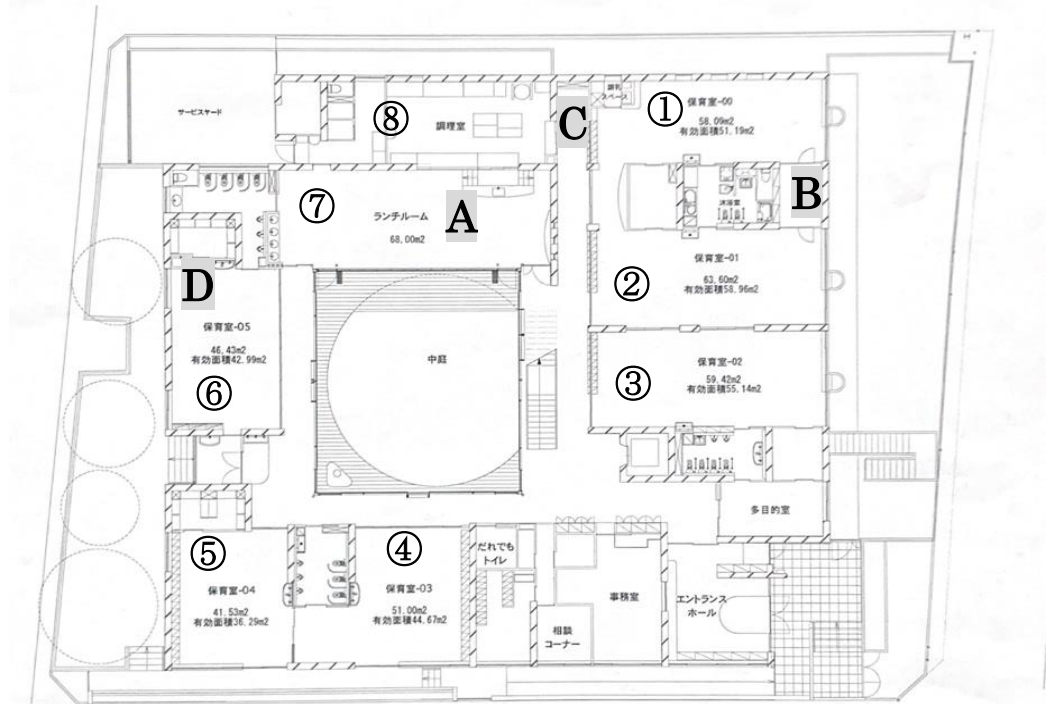
*English Title of How to create an environment that supports the growth of children~ For a cozy sound environment~ By Yasuhiro Takano (ooguno.takano@gmail.com ooguno nursery school/JAPAN)

園舎 1 階見取図

- ① 0 歳児室
- ② 1 歳児室
- ③ 2 歳児室
- ④ 異年齢「もり」
- ⑤ 異年齢「かわ」
- ⑥ 異年齢「うみ」
- ⑦ ランチルーム
- ⑧ 給食室

課題

A・B・C・D



3. 【職員向け音環境研修】を通して、インプットとアウトプットによる実践。

- ・[講義形式]による音環境に関する基礎知識のインプットを行なった。
- ・『音環境に目を向けたとき、大久野保育園の問題となる場所はどこだろう?』で各グループに分かれてディスカッションを行なった。職員からは「音を通さない」「木材の設置や布などをかける」などのアイデアが出たが、吸音から考えると、大きな効果が出ないものであった。

しかし、初めての話し合いだったので、今後に期待の持てる活発な議論だった。

「改善策の一つでもやってみる」という宿題が佐藤先生から出され、第 2 回目の研修に向けてできる実践をやることになった。

課題としてあがってきた空間

- A. ランチルーム
コンクリート打ちっぱなしの壁、広い面積のガラス面でとにかく響く空間。
- B. 0 歳児と 1 歳児の部屋の間
繋がっていて泣き声や音もれがする
- C. 給食室の音や大人の音が響く廊下
作業のかちゃかちゃした音や配膳時の大人の音が響く
- D. 幼児部の部屋
かまぼこ型の天井、壁面の多い形状で何か落ち着かない。

4. 騒音レベルの測定

音環境はどうしても「個人の感覚で差」が出てしまうと感じた。「なんとなくうるさい」「いつもこんなもの」と慣れれば慣れる

ほど、意識は向かない。少しでも課題意識を持ち、“自分事”として捉える一助とするため、測定を行なった。

使用したのは手軽に測定できる、携帯アプリを使用し、測定を行なった。

○測定時間

あ) 夜間の無人の時間帯

い) 9:15~13:30 の間で一時間毎に測定

○測定場所

上記①~⑦と 2 階ホール[当園では唯一吸音材が使われている部屋]

○測定結果

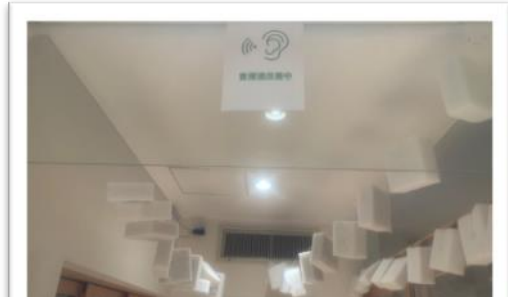
測定結果としては、あ)・い) の違いは 10~20 dB くらいの違いだった。しかし、結果を園内で共有すると、職員からは「思ったほど数値が変わっていない」「そんなにうるさいとは思えない」など感覚的なものであり、測定しても意識が変わるほどのものではなかった。



5. 吸音材を使用した【トライアル実践】

最も気軽にトライアルができ、かつ人流が多くある「課題 C.」の廊下へブロック状のポリエステル不織布製吸音材を吊す形で設置した。設置後と撤去後の感じ方に大きな変化があった。

設置後は「なんとなく小さくなった」「あまり変わらない」という感想がほとんどであった。しかし、2週間が経過し、撤去した後は「うるさくなった」「あったほうが良い」など、効果があったという感想に変わっていた。このトライアルをきっかけに、吸音材の効果や音環境改善のメリットについて大きな意識の変化につながった。



ブロック状の吸音材を吊るした様子

6. 【具体的な5つの改善実践例】

○具体的な実践例

改善策のアイデアが出てくる中、大がかりな工事は予算面で考えにくかったが、やれることを探りながら、実践していった事例を5つ挙げる。

具体例①【給食室と乳児保育室に繋がる廊下】

改善したい理由

- ・調理器具ががちゃがちゃうるさい。
- ・大人の会話や挨拶が響く。

改善策

吸音材を天蓋のように吊し、より広範囲の吸音を図った。防災の布で覆うようにした。

改善後の変化

- ・調理の音が響かなくなった。
- ・大人の話し声が聞こえなくなった。
- ・泣き声が廊下に聞こえにくくなった。

(特に新入園児の増える4月は激変)

課題

吸音材が防災素材ではない為、設置する際に工夫が必要である。



布状吸音材を防災素材で覆って吊るした様子

具体例②【幼児室の「絵本コーナー」】

改善したい理由

- ・子どもの声が響きすぎる。
- ・支援の必要な児童が落ち着くスペースが必要。
- ・室内の吸音材を設置するスペース確保。

改善策

- ・木材で囲いを作り、上部や側面にポリエステル不織布製吸音材をつけた。

改善後の変化

- ・落ち着けるスペースになり、支援の必要な児童だけでなく、全ての園児が絵本を落ち着いて楽しむことができている。



吸音材を設置した絵本コーナー

具体例③【幼児室クラス「うみ組」の部屋】

改善したい理由

- ・子どもの声が響きすぎる。
- ・支援の必要な児童が落ち着かない。

改善策

- ・「テーマ発展保育」で無理なく、遊びの展開を通した音環境へのアプローチ。
- ・遊びで作った紙、布、風船など様々な材料を「吊るす、貼る、飾る」



「ジャングル」のテーマで装飾し、音の響きを緩和した部屋の様子

改善後の変化

- ・響きが緩和された
- ・落ち着いた環境で過ごすことができた。

課題

「テーマ発展型保育」は時期が来るとリセットするので、元の環境に戻ってしまう。
※「テーマ発展型保育」は大久野保育園が独自で実践している保育内容。

具体例④【乳児室3部屋の改善】

☆乳児3部屋を改善した経緯

「問題出し」を職員で行った際に、「0歳児と1歳児の間が繋がっていて泣き声や音もれがする」という問題点が上がっていた。船場先生、佐藤先生と解決案を探っている際に「響きすぎる部屋環境がそもそもの問題では？」ということになった。園では、日常の保育が「ケアワーク担当制」によって穏やかに送れているので、問題視してこなかった。改善することで「乳児の環境にメリットが大きい。」ということで、コストを抑えながら改善する方法を探ることとなった。

改善したい理由

- ・0歳児と1歳児、相互に泣き声やおもちゃの音などが聞こえ、寝ている乳児が起きてしまう。

改善策

- ・乳児の3部屋の天井に吸音材を施工。
- ・1、2歳児の部屋は「ロックウール吸音天井材」を地元工務店が施工。
- ・0歳児の部屋は「超軽量不燃天井材」をセルフビルドで長谷川・早大佐藤先生・高野が施工。



超軽量不燃天井材を施工する様子

改善後の変化

- ・セルフビルドの途中（1/4くらいの施工）ですでに効果を感じることができていた。施工後、各部屋の効果は大きく、過ごしやすく快適な空間となった。
- ・新年度は新入園児が園に慣れるまでは、泣いている乳児がいて、騒がしい状況が続く。しかし、改善後の新年度は廊下に響く声が少なく、効果を実感できた。

課題

- ・工期があり、保育を止めることができない場合は実施が難しい。
※当園は次年度へのクラス移行のタイミングで実施。（他園では珍しい2月下旬に、次年度クラスへ移行している）
- ・超軽量不燃天井材はセルフビルドでもある程度は簡単にできるが、コスト面が課題となる。

具体例⑤【落ち着く空間作り】

☆支援の必要な児童が利用するため「カームダウン・クールダウン空間」を作った。

改善したい理由

- ・要支援の児童が落ち着ける場所が必要。
- ・階段下のデッドスペースの有効活用。

改善策

- ・階段下に様々な吸音材を使って、隠れ家のような空間を造成する。

改善後の変化

- ・気持ちが“わさわさ”している児童が自ら宣言し、利用している。



階段下に作った落ち着く空間

7. まとめ

様々な実践を通して、音環境の改善による効果を感じられた。全ての部屋の改善が終わるまで継続していく。子ども達の[安心できる空間][穏やかな空間となり、ゆったりした時間]が流れている点は特に評価できる。

保育者の感想では「響き方が違う」「キーンという音がなくなり、頭が痛くならない」などポジティブなものが多い。“音”に目を向けた職員でも、個人の感覚に委ねられる部分が大きく、「音環境」の奥深さを改めて感じている。

その一方で、完成している“ハコ”を改善するには、[コスト面][専門家のアドバイス][施工の工夫]など課題がたくさんあると痛感した。「子どもの育ちを支える環境」を求めるのは保育所の責務である。今後も登園は[時間 空間 物 人]で環境構成を考えていく中で、音環境の大切さも伝えていきたい。

今思うことは、[発達過程にある子どもの育ちに“音”がどう関わり、影響を与えているのか]についても実践知を磨き、子どもの最善の育ちに繋げていきたいと考えている。

8. 最後に

「音環境改善」から始まり、今回も発表という貴重な機会をいただき、佐藤先生、船場先生、野口先生に心より感謝申し上げます。「全国の子ども達と保育者の環境改善」に少しでも役立つのであれば幸いです。